
TRUMP?

四季 華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUMP?

【Nコード】

N0948Y

【作者名】

四季 華

【あらすじ】

この世界には妖達が蔓延っている。

そう口々に伝えられたのは、今より何代前の人間達までだっただろう。

今や人々は妖を畏れることなく、非科学的なものとして笑い飛ばしているはずない、と。

廃れていく現代において、その店は時代の流れに逆らって存在していた。

『四季文房具店』

又の名を、妖万屋。

ひっそりと建つ古ぼけた文房具店に、救いを求める人や妖は少ない。

！
妖万屋である四季春一と妖怪達が織り成すアクション・ファンタジ

プロローグ（前書き）

シリーズ、TRUMPの三部目です。

今作品だけでなく、前作も読んでいただけると幸いです。

プロローグ

プロローグ

この世界には妖怪が蔓延っている。

そう伝えられたのは今よりも何代も前の人間達までだった。今の人間達は、妖怪の存在など笑い飛ばす。いるはずない、と。先祖たちが作ったまやかしの存在だと。

しかし、妖怪は現存する。その息の根をひっそりと殺しながら。人間達に紛れ、その正体を隠しながら、この世界に棲んでいる。

人間達の無理な経済成長についていけなかった妖怪達は、今や世界の隅に追いやられている。本来共存していたはずの人間と妖怪は、人間主体の世界になったまま、今回っている。

人間と妖怪の均衡が崩れ、世界は不安定で無秩序な状態を保持していた。

そんな妖怪達が存在する現在の世界に、妖怪達の力になって立つという人間がいる。人間達に虐げられる妖怪達の力になり、道を踏み外し罪を犯す妖怪達を正す存在。それが四季文房具店副店主のしきはるいち四季春一である。

四季春一という一人の少年こそ、妖怪のみが放つ妖気という気を感じ取ることができ、それ故に妖怪と人間の間に立つ者である。妖万屋という看板を掲げ、日々妖怪と向き合っている。

彼をサポートするのは助手兼四季文房具店長の夏輝なつき、そして春一の幼馴染である七紀文ななきじょう、五木琉妃香いつきるひか、少年課の藤刑事ふじ、情報屋の夢亜むあ。妖怪世界にも秩序がないわけではない。枢要院すうよういんと呼ばれる妖怪世

界の警察のような組織が妖怪達を取り締まっている。しかし、彼らも妖怪だけに、人間との争いの時には出られない。そんな時にも春一が動く。妖怪についての全ての揉め事に首をつっこんではそれら

を解決していく。それが四季春一の正体であり、妖万屋の仕事だった。

彼を支える二人の幼馴染。丈と琉妃香に加え春一の三人は、かつてトランプと呼ばれ恐れられた伝説のチームである。春一の「一」が表わす「エース」、丈が表わす「ジョーカー」、琉妃香の「妃」が表わす「クイーン」が切り札ということで、その名前がいつしか勝手につけられた。本人たちは不良とみられることに不満を感じていたが、今もそのチームワークに乱れが起こることもなく、寧ろ絆を深めながら事に当たっている。

春一は今日も自慢のバイクを駆りながら、妖怪と人間の間を取り持つ仕事に向かう。

「夏、海行こう」

日本の真ん中あたりに位置する県の西部地域にある数珠市。その小さい市の中に、四季文房具店という古ぼけた文房具店がある。家と店舗が一緒になっていて、一階は店舗、二階は居住スペースとなっていた。文房具店内には、小銭で買える鉛筆消しゴムから、諭吉が何人が要るほどの高級万年筆まで並べられていた。そして店舗へと直接階段でつながっている二階のダイニングでは、春一がソファにうなだれながら夏輝に話しかけていた。

四季春一。彼の垂れた目にはやる気が感じられず、短めに立った茶髪のサイドには銀色のメッシュが三本入っている。耳にはピアスが二つ、行儀よく並んでいた。服装はいたって不良で、胸元がはだけた黒いYシャツにジーンズをはいていた。百七十七センチという長身をソファに埋めて、だらけている。対する夏輝は細長の優しさであふれている目に、整った顔立ち。少し長めの黒い艶やかな髪をしつかり整え、白い清潔なYシャツと黒の折り目のついたズボンをはいていた。春一よりも十センチ背が高く、姿勢よく椅子に腰かけている。この二人の写真を額縁に入れるのなら、優等生と劣等生、そんなタイトルを付けて飾っておきたいくらいだ。

「もうすぐ九月ですよ？」

「まだ八月だ」

夏輝のいつもの敬語に、春一は堂々と返す。年齢で言ったら夏輝の方が七つ年上なのだが、彼はいつも敬語で喋る。妖関係になると春一が師匠になるからだ。彼の元来の癖というのもある。

「数珠海岸の海の家は八月三十一日までやってる。つまり、明日までは海が開かれています。というわけで、行こう」

「何で突然」

「一言で言おう。暑いからだ」

今年の夏は猛暑日が続いた。夏の間、太陽はどうやら休むことをしなかったようで、日差しはさんと降り注ぎ、人々の体力と水分を奪った。涼を感じられるグッズが飛ぶように売れ、試しに四季文房具店でもアイスを売り始めてみたら即完売した。春一は「冬は肉まんかな」などと言っている。

九月を前にした現在でも猛暑は続き、夜になっても熱帯夜の毎日だった。

「何故今日なのです？」

「今日は特別暑い。そしてこの時期なら宿題に追われる学生諸君が家に閉じこもっているから、海も空いてきただろうという俺の推理による」

「ハルじゃないんですから、みんな宿題はもう終わらせてますよ」

「俺は小学校から高校まで、宿題を夏休みの最後にやったことはない」

「どうせ、そもそも宿題をやらなかったんでしょ？」

「小学校一年生の時は怒られたが、二年目からは先生たちも諦めて何も言われなくなった」

はぁ、と溜息をつく夏輝に舌を出してから、春一はようやくソファから腰を浮かした。

「とにかく、俺はもう海モードだから、海に行こう」

かくして、春一達は海へと乗り出した。海はまだ人がいっぱいいて、砂浜のそこかしこにパラソルやシートが敷いてある。

「おー、俺海久しぶりだよ！」

「ハル、誘ってくれてありがとー」

幼馴染の丈と琉妃香も誘ったら、二つ返事で来るといっているので、彼らも車に乗せて海にやってきた。丈は春一よりも明るい茶髪に黒いメッシュを三本入れ、幼さが残る顔ではしゃいでいる。琉妃香は肩の少し下まである金髪をカールさせて、その大きな瞳を輝かせている。

それぞれ水着に着替え、海の家近くの空いているスペースに腰を下ろす。

「お、おいジョー」

「あ、ああ、ハル」

春一と丈は二人でそわそわしていた。理由は琉妃香にある。

「二人とも何下ばっか見てんの？力二でもいるの？」

琉妃香のビキニ姿がとてつもなく可愛く、艶めかしさすら醸し出しているため、二人は今更になって幼馴染を直視できなくなったのだ。

「な、なあ、琉妃香ってあんなに女っぽかったっけ？」

「知らねーヨ！」

小声でこそと話している春一と丈に、琉妃香が近づく。すると二人とも顔を赤くして急いで視線を空へと逸らした。

「ははーん、さてはあたしの水着姿に見とれてるな？」

「んなわけねーだろ！お前の水着姿なんてしょっちゅう見てたしよ」

「そうだぜ、小学校も中学も一緒に水泳の授業やった口！」

「それスクール水着だろ！」

琉妃香が二人の頭を引つ叩く。二人は前につんのめって、そこを琉妃香に体当たりされて砂に倒れた。

「お前ら埋めてやるーか？」

悪戯っぽく笑う琉妃香に、二人はたじたじだった。

「あれ？夏兄水着じゃないの？」

春一と丈が顔を見合わせてどうしようかとしているときに、琉妃香が夏輝に話しかけた。夏兄というのは、琉妃香なりの呼び方だ。当の夏輝は、ショートパンツにシャツを着て、ボタンはいつもよりも外しているものの、水着ではない。砂浜で観覧を決め込むらしい。

「もう海で遊ぶ年でもないのよ」

控えめに断る夏輝に、琉妃香はつまらなそうに足で砂をかけた。

夏輝は口の中に入った砂を吐き出している。

「ナツちゃん、ノリわりーナ」

「こいつ、名前は夏のくせに夏苦手なんだよ。暑いとすぐばてる」

「おもしろー」

「あたし海入ってくるよー」

琉妃香が一足先に海へと向かう。夏輝はシートの上に座り込んで、春一と丈は砂浜にうつぶせになって寝ている。

「女の子は元気だねー」

「若いしナ」

「それを言ったら私はどうなるんですか」

なんてくだらない会話を三人の男たちでしていると、水の中に入ってきた琉妃香に一人の男が近づいた。ナンパのつもりらしい。三人は特に心配もせず、それを見守っていた。琉妃香のことだから、その内平手打ちの一発でもかまして立ち去るだろう。

しばらく男の方が話していても、琉妃香は聞く耳を持たなかった。そっぽを向いて、小さい子供に手を振っている。そこで男が強引に琉妃香の手を掴んだ。すると、すかさず反対の手が男の頬に飛んで

きた。

「ほら、やつぱり」

「かわいいソー」

しかし、それでも男は諦めない。無理やり腕を引っ張って、琉妃香を連れて行こうとする。

「行きますか」

春一がそういうと、丈と二人で男の方に近づく。春一が男の後ろからがしつと肩を組んで、丈が下から睨みを利かせる。

「こんにちは。俺らの幼馴染に何か用すか？」

「おにーさん、いい年こいてそんなことすると俺ら黙ってないつすヨ？」

「あああああ！」

二人が出ていくと、男は突如大きな声を出してその場にへたり込んだ。尻餅をつく格好になった男は、がくがくと震えて三人を指さしている。

「何？俺らまだ何もしてないけど」

「あ、あんたら、ランプだろ！すみませんでしたっ、ランプの方だとは知らずに……。オレ、中学の時アンタらに喧嘩売って返り討ちにされたんですよ、すみません、もうしません！」

三人は中学時代の記憶を一つずつ思い出していったが、どうにも出てこない。彼らに中学時代喧嘩を売って返り討ちにされた人間など、数知れない。

「あ、あのっ、オレその海の家店主なんです。何でもタダでいいんで、許してくださいっ」

そういつて男は海の家へと駆けこんだ。三人はぼかんとその場に立ち尽くした。

「きゃあっ！」

叫び声が上がったのは、四人が砂で山を作っていた時だった。琉妃香が砂で山を作ろうと言い出し、それならばトンネルを開通させようと丈が言い出し、そしてそれなら水が必要だと春一が言った。結果として、夏輝がバケツに水を汲みに出されたのだが、彼が水際から春一達の元へ帰るとき、叫び声が上がった。夏輝が振り返ると、一人の女の子が溺れていた。足を吊ったのか、腕を上にあけてもがいている。夏輝はすぐに海へ飛び込み、子供の元へと泳いだ。彼が子供に手を貸すと、女の子は安心したように力を抜いて、夏輝に体を預けた。

「もう大丈夫だよ」

そのまま岸まで泳ぐと、女の子の両親と春一達が彼らを迎えた。

「大丈夫か？」

「ええ。少し水を飲んでいようですが」

女の子は岸に座ると、何回か咳き込んで水を吐き出した。

「大丈夫？怖かったね」

夏輝が優しく言くと、女の子は彼の腹に抱き着いた。

「おい、犯罪だぞ」

「ハル！」

夏輝は女の子の頭を撫でながら、春一を睨みつけた。当の春一は女の子の頭を撫でて、素知らぬ顔をしている。

「どうしたの？足が吊ったのかな？」

「あのね、何か引つ張られたの」

「引つ張られた？」

夏輝の問いに、女の子はこくりと頷いた。自分の足を手で握る。

「こんな感じで、ぐいって引っ張られたの。それで海に引き込まれそうになって」

「本当に？」

「うん」

女の子の目には微塵も嘘は感じられない。彼女は真っ直ぐな瞳で夏輝を見据えている。

「すみません、この子変なこと言って。気にしないでください」
「はあ」

母親は彼女の手を引いて、礼を述べて立ち去った。残された春一達は、互いに顔を見合わせて煮え切らない表情をしている。

「ちよつと調べるか」

その春一の言葉に、全員が頷いた。

海の家はそれなりに繁盛していた。ヤキソバや冷たい飲み物、かき氷などが売られていた。先ほど琉妃香をナンパした店主の男と、アルバイトとみられる高校生くらいの少年の二人で切り盛りしているようだった。

「かき氷四つ。ブルーハワイといちご二つずつ」

「ありがとうございます！」

少年は春一の注文に元気よく返事して、氷を削り始めた。程なくして赤と青のシロップがかかったかき氷が四つ出来上がった。四人はそれを店内で食べながら、店主の男に声をかけた。

「あのさ、この海で今までに事故とかあった？」

「え、そ、そんなないっすよ」

春一の問いに答える店主の男は、至って挙動不審で、怪しい。春一達がじと目で見据えると、男は居心地悪そうに体をもぞもぞと動かしながら、頭をぼりぼりと掻いた。

「ここだけの話にしてもらえますか？そうしないとオレの商売も上がったりですよ」

「そりゃあ、このマイナスになるようなことはしないよ。素直に話してくれば、だけどね」

春一が軽い脅しをかけると、男は顔をひきつらせて、春一達が座っているテーブルの方までやってきて、丈の隣に座った。そして、声を潜めて周囲を気にしながら話し出した。

「実は、最近変な事件が起きてるんすよ」

「事件？」

「はい。海で泳いでると、誰かに足を掴まれて水中へ引きずり込まれそうになるっていうんです。被害に遭った人たちは今夏だけで十

人くらいになると思います。でも、すぐに手を離されて、後は何にもないっていうから、事故にもならず終わってるんです。こっちは評判落とされちゃたまんないから、誰かの軽いいたずらでしょう、で終わらせてるんですが、それにしたって件数が多すぎる。今年だけですよ、こんなことが起きるの。今までは何にもなかったのに」

春一達は顔を見合わせた。やはり、女の子が言っていたことは本当だったのだ。

「ふーん、成程ねえ。嫌なにおいがしやがるぜ」

春一は口で器用にスプーンをいじると、食べ終わったかき氷の皿にスプーンを置いた。そして立ち上がる。

「ちよいと調査してみますか」

春一と丈は海の中に入って様子を見ることにした。それぞれ少し距離を取って、様子をうかがう。試しに水の中に潜ってみても、変わったものは何もなかった。

「！！」

そんな中、春一と丈がばつと同じ方向を見た。微かに感じられる妖気が、こちらに近づいてくる。妖気は歩くスピードで春一の方へと向かっている。春一は体勢を整えて、来るべき時を待った。

「来たなっ！」

春一が叫ぶ。彼の右足に手が絡まり、海の中へと引きずり込まれる。春一は敢えてそれに逆らわず、水中に潜って自分の足を掴んでいる手を逆に捕えた。目を凝らすと、相手は人魚のような姿かたちをした妖怪だった。長い髪に、半身が魚のように尻尾になっている。彼女はびくりと体を震わせて、逃げようとしたがそれを簡単に逃がす春一ではない。すぐに丈もやってきて、人魚は海上に顔を出した。

「琉妃香、ボート持ってきて！」

春一が岸に向かって叫ぶと、琉妃香が小さめの筏のようなゴムボートを持ってきた。三人でそのゴムボートに乗って、人魚の話を聞く。春一はもう手を離しているのだが、それでも彼女には逃げる気配がない。

「逃げる素振りがないってことは、観念したってことでいいのかな？ ミス・マーメイド」

「ごめんなさい……」

人魚は下を向いたまま、小さな声で謝罪した。その双眸からは今にも涙が溢れ出しそうである。

「ごめんで済んだら枢要院いらないよ。何であんなことしたのさ？」

「一步間違えれば事故になった」

「すみません……」

言葉を変えて再び謝罪する人魚に、春一ははあとため息をついて、頭を掻いた。彼は琉妃香以外の女が苦手である。

「俺も別に怒ってるわけじゃないんだ。素直に話してくれれば、それでいい」

彼なりに声音を優しく言うと、人魚は春一達を窺い見た。そして、意を決したように口を開いた。

「この海が汚くなったから……」

「この海が？」

「はい。私は見た通り人魚の妖怪です。私たちの種族は、綺麗な水がないと生きていけません。この海は最初、とても綺麗な海でした。だから私達もここに棲むことを決めました。でも……」

「汚くなってしまった」

春一が言葉の続きを代わりに話すと、人魚は再び悲しそうな顔をして目を伏せた。

「そうです。人間達がこの海を荒らすようになって、私達の住処が段々狭まっていったんです。あそこに海の家があるでしょう？あそこの店主は、最近ごみを海に流すようになりました。処理が面倒になったのかは知れませんが、彼が私達の住処を小さくしているのは確かです。だから、小さな騒ぎを起こして、ここに人を近づけないようにしてやれと……。すみませんでした」

人魚の目から涙がぼろぼろと流れ落ちる。春一は困ったようにまた頭を掻いて、考えあぐねた結果、人差し指でそつと彼女の涙をぬぐった。

「俺が、協力しよう」

その一言に、人魚はぱつと顔を上げて春一を見た。その両目は驚きで開かれている。

「俺が、その店主にもう海を汚くしないように言っておこう」

「何で、そこまでしてくれるんですか？見ず知らずの妖怪のために

……」

「俺は妖万屋の四季春一。見ず知らずの妖怪のために動くのが仕事さ」

そついうと、人魚は笑顔になって、今度は嬉し涙をぽろぽろと流した。

「おいおい……俺は女の子に泣かれるとどうしたらいいかわかんないんだよ。琉妃香、こういう時はどうすればいいんだ？」

「そのままでもいいんだよ。見守ってあげれば」

「ふん」

困ったように頬をポリポリと掻く春一は、最後に人魚の頭にポンと手を載せて、笑いかけた。

「俺を信じて」

人魚は涙を流しながら、何度も何度も頷いた。

「いらつしゃいま、せ!？」

海の家に戻り行くと、店主の男が椅子に座って壁を背もたれにし、煙草をふかしながら新聞を読んでいた。新聞から目を上げると、恐ろしいほどににこやかな春一がいた。その後ろにはこれまたにこやかな丈と琉妃香。

「アンタさ、仮にもここの店主だろ？海を汚すようなマネしちゃいけねーわな」

「えっ？何でそれ知って……」

ひくついて煙草を落とす店主に、春一は一切の笑みを消し去って彼に詰め寄った。壁にバンと手をついて、眉間に皺を寄せた目で店主を睨む。

「お前自身がこの海を汚さないこと。そして、客にもそれを厳しく言うこと。なんにしろ、この海をきれいな状態で保つこと。わかった？それができなきゃ、俺ら黙ってないからね？」

「ひいつ……わかりました！すみません、もうしませんっ！」

店主は地べたに土下座して、何度も頭を下げた。それを見届けた春一達は、無表情から一変、にこやかになって店主に背を向けた。そして店からの去り際にアルバイト中の少年の肩に手をポンと置く。「喜ぶといい。君は頑張ってるから、今日から時給百円アップだそうだ」

「えっ、マジすか!？」

「良かったな。頑張りはいつしか認められるものだ」

そのあと海の家には、嬉々とした表情の少年と、泣きつ面の店主とが残された。その後、春一達は海を満喫して帰路についた。

ここ数珠市には、北神大学ほくしんと呼ばれる大きな大学がある。市の北側を埋め尽くすほどの広大な敷地面積に、様々な学部学科。日本で一番レベルが高い大学として知られるこの大学は、学生達の憧れの的であった。よって北神大学の門をくぐる者も自然と注目を集めるのだが、その理由とは別の理由で周囲の注目を集めている生徒達がいた。

「ジョー、琉妃香、今日二限って入ってる？」

「俺入ってねーヨ。空き時間」

「あたしもー。ハルは？」

「俺も入ってねーからさ、早めに学食行こうぜ。混む前に食っちゃまおう」

「さんせー」

「あたし何食べよっかな」

色とりどりの髪の毛に、あくまでも不良テイストな服のセンス。目が合ったら確実にすぐに逸らしてしまうような外見の三人組。トランプである。

彼らは高校が全員違ったものの、大学で再び一緒になることができた。大学に入ってから毎日一緒にいて、こうしてキャンパス内を歩く姿も、後期が始まった今ではすっかり馴染みのものとなった。「んじゃ俺これから発達心理学の授業だからー」

「おー、じゃあまた次の時間ナ」

「じゃあねー」

三人は一度別れ、春一は発達心理学が行われる教室へと足を向けた。そして、教室に入る前、彼は突然立ち止まった。

（妖気……？）

神経を澄ませると、教室の中から確かに妖気が漂っている。彼は慎重に一步を踏み出して、中に入った。階段教室となっている室内の中ほどに、外見は人間と何も変わらない、一人の少年がいた。

控えめな茶髪に、真面目そうな顔つき。服装も至って普通の大学生で、清楚だ。春一の対極にいるような、そんな少年だった。

「よう」

春一はそんな少年の隣に腰掛けて、彼に話しかけた。妖怪の少年は突然話しかけられたことに驚いたようだが、春一の顔を見るとすぐに笑顔になった。

「ああ、春一さんですよ？ 妖万屋の」

妖万屋、というワードを小声で言って、少年は春一に会釈した。

今度は春一が少し驚いた。自分のことを既に知っているとは。

「俺のこと知ってんの？」

「僕、丹羽詞（にばし）なんです。僕らの種族が前に人間と揉め事を起こしたときに助けてくれましたよね」

「ああ、あの治癒力が高い種族の。確かに前に面倒見たっけ」

「僕は凛（りん）です。よろしく」

「改めまして、春一っす。よろしく、ハルでいいよ」

二人は握手を交わした。そこで、春一の頭に疑問がよぎる。

「あれ？ 前期にいたっけ？」

「僕、転入してきたんです。だから前期はいなかった」

「だよ、見てないもん。学科は何？」

「心理。ハル君は？」

「俺も心理なんだ。一緒だな」

「そっか。ハル君がいてくれてよかったよ。心強い」

「まあ、俺でも少しは役に立てるよ。例えば、数ある食堂でも二号館のが一番うまい、とかの情報提供とかね」

「そうなんだ。今日行ってみるよ」

「二限空いてる？ 俺、行くんだけど一緒にどう？」

「ありがとう」

春一と凜は、それぞれ授業が終わった丈、琉妃香と落ち合った。春一はそこで凜を二人に紹介して、一緒に食堂まで行った。

「このオムライスはお勧めだよ」

「へえ。じゃあ、オムライスにしようかな」

琉妃香の勧めに応じて、凜は早速食券を買い求めた。春一達もそれぞれ好きなものの食券を買う。中に入ってテーブルにつき、食事が到着するのを待つ。

「凜は何で転入してきたんだ？」

水を飲みながら、春一が凜に尋ねる。丈と琉妃香も興味津々に転入生を見ている。凜はちよつと困ったように笑って、「引越したんだ」と答えた。

「ふうん。どうせなら最初っから来ればよかったのに」

「急に決まったことだったから」

その後、運ばれてきた料理を食べ、食事を済ませた四人は、また授業へと散って行った。

「なあ、凜。わかってるよな？」

「大学変えたくらいで俺らから逃げれると思ってんなよ？」

「はい、二択。煙草押し付けられるのと、金出すの、どっちがいい？」

夕方から夜へと変わった、そんな時間。北神大学近郊の公園では、凜が三人の男に囲まれていた。その内一人には目前に煙草を構えられていた。

「今日は、お金、持っていないんだ」

凜が恐る恐る言つと、男達は舌打ちをして、煙草を吸っていた男

が迷わず凜の顔に煙草を押し付けた。凜の悲鳴が公園内に木霊する。
「何でかしんねーけど、お前はすぐ治っちゃうからな。こっちはやりたい放題だぜ」

「はい、もっかい二択。殴られるのと金出すの、どっちがいい？」

凜は溢れだす涙をぬぐうことすらできずに、胸倉を掴まれた。ふるふると首を振ると、容赦ない拳が彼の頬を打ち据えた。

「ダメだ、コイツ今日は金持ってるねーよ」

「んじゃ適当に痛めつけて終わりにするか」

男はペツと煙草を吐き捨てると、倒れた凜の腹に蹴りを打ち込んだ。それを皮切りに、何重もの蹴りが凜の体にめり込んだ。

凜は男達が去った後も、公園で蹲り、ただ涙を流した。

次の日は、数学系の一般教養科目で凜と春一達が全員一緒になった。一限目の授業で、始業まではあと三十分強ある。凜は笑顔で三人と再会した。

「よう、凜」

春一が大あくびをしながら凜の横に座る。丈と琉妃香は一段下の席に座って、凜に朝の挨拶をした。

「おはよう」

「凜、何かあったのか？」

「え？」

春一の突然の問いに、凜は一瞬きよんとした。意味が分からず呆けていると、春一がポリポリと頭を掻いて溜息を吐き出した。

「まあ会って二日の奴に言いたくはねーかしんねーけど、何かあったなら言えよ？」

「う、うん……」

自分が問題を抱えていることは、春一にはお見通しだったらしい。しかし凜は友人になったばかりの春一達に迷惑をかけることもできず、歯切れの悪い返事をして黙った。

「もし、ダチに迷惑かけるのが悪いって思ってたんなら、そいつは考え過ぎってやつだぜ。迷惑かけるからこそ、ダチって言えるんだろうが」

またも見透かされていた。凜は遂に何も言えなくなつて、ただ俯いた。

「まあ、そんなに重く考えんなよ。もしダチだからってところで萎縮してんなら、俺に依頼をすればいい」

「依頼？」

「俺は妖万屋だぜ？妖からの依頼を遂行するのが仕事だ」

「あ……」

そう言われると納得してしまう。凜は心の中で葛藤をしつつも、このことはいつまでも自分一人で抱え込むわけにもいかないと思い、事情を春一達に話すことにした。

「前の大学で一緒だった人達なんだけど……」

「成程ねえ。そいつはちよつとばかり可愛げがねえ遊びだな」

「大学を変えたのも、それが理由なんだ。ここまで追ってくるとは思わなくて……」

「そつか。よし、依頼は引き受けた。そいつらを黙らせればいいんだな？」

「で、でも、怖い人達だから、危ないよ？」

「修羅場なら潜り慣れてるんだよ」

二カッと自信満々で笑う春一に、凜は安心感を覚えて笑顔で頷き返した。

その日の帰り道、凜は春一達とは別方向のため、一人で歩いていた。すると、後ろからバイクの爆音が近づいてきた。まさかと思い振り返ると、凜の願いもむなしく、昨日も来た三人組だった。

「凜ちゃん、ちよつとツラ貸して？」

言われるがままに昨日と同じ公園に連れて行かれ、恐怖に身を縮まらせていたら、肩をドンと押されてフェンスに叩きつけられた。

「で、金は用意したんだよね？」

「昨日はなかったけど、今日はあるんだよねー？」

「俺らもそんな長い長い方じゃねえから、そろそろ出しといった方がいいよ？」

にやにやしながらにじり寄ってくる三人に、凜はカタカタと肩を震わせながら、喉の奥から声を絞り出した。

「きよ、今日もないよ……」

「ああ!？」

一人がガシャン、とフェンスを蹴って脅すと、もう一人が凜の胸倉を掴んで立たせた。そして思い切り殴る。

再びフェンスに叩きつけられた凜は、ぼろぼろと涙を流しながら、頬の痛みと口の中に広がる鉄の味に必死に耐えていた。

「凜、いい加減にしろよ!」

「いや、あのゼファーとケッチシブいね」

「……!？」

突然全く違う声が介入してきた。しかし、三人組の後ろから現れたあの人物はいい天気でも眺めるようにバイクを遠巻きに眺めている。

「で、お前らだな、俺らのダチを恐喝してるってのは。あのねー、

いい年こいてやることが狡い。^{こす}大学生なら自分で働いて稼ぎなさい。
お母さん泣いてるよ?」

「何だお前!」

「だから凜のダチだって。さっき言ったじゃん。質問のレベルが低すぎる」

「ああっ!?!」

一人が春一の胸倉を掴む。そのまま殴らんばかりの勢いだ。

「あのさ、服伸びるから離してくれる?」

「ふざけんなっ!」

春一を殴ろうと腕を引いた瞬間、横から春一の左手がフックのようによってきて、そのまま頭を掴み、その勢いで頭を地面に叩きつけた。

「がっ……」

「離してつて、言つたよね?」

春一の冷たい台詞がその場の空気を凍らせる。凜も、残りの二人も固まっている。

「どうする、凜?俺がその気になれば、残りの二人も片付けられるけど、やっちゃんおうか?」

「ああ?」

「ちよつと黙つてろよ。俺今凜と話してんだろ」

「なっ、デメッ」

春一に手で制され、口では突っかかるものの、いざ行動に出そうとすると地に沈んだ仲間を見てしまう。目の前の男は確実に自分たちよりも強い。

「何ならお前がこいつら殴つてもいいんだぜ?今までの仕返ししてやれよ」

「え……」

「お前が遭つてきた目をこいつらに味わわせてやるんだ」

凜はその言葉に衝撃を受けた。自分が遭ってきた目を逆に味わわせる。そんなことは考えていなかった。だが、今ならそれが可能だ。春一がいる。ならば

「で、でもね、ハル君。僕、やっぱりそういうのはいけないと思うんだ。ハル君の言うことが正しいのかもしれない。けど、僕の信条とは違う。僕は、闇雲に人を殴りたくない」

凜が春一の顔を窺いながらゆっくり言った。言い終わると、春一の顔を下から覗き込んだ。もしかしたら怒っているかもしれない。「よく言った！」

しかし、春一は凜の予想とは全く違って、明るく笑っていた。「ゴメン、ちょっと試した。それでこそ凜だ。やっぱりそうでなくちゃ」

凜とがしつと肩を組んで、春一は笑いかけた。一人でうんうんと頷いている。

「さて、お前ら、凜は見逃してくれるそうだが？あ、そこで寝てる人は凜を殴った罰ということだ」

「何さらつと締めようとしてんだテメエッ！」

「あれ？ダメ？」

しれつと言う春一に、残りの二人はぐつと詰まりつつも、このまま引き下がれない思いの方が勝り、春一達の前にずいっと詰め寄った。

「このまま黙ってる俺達じゃねえんだよ」

「お前ら、タダじゃ帰さねえ」

「うおー、このゼファーとケッチシブいナー！」

「本当だ！ケッチはタンクに傷入ってるけどね」

「「!？」」

再び突然に知らない声が介入してきた。二人がそうつと振り返ると、そこには黒いメッシュを入れた不良と、金髪の美少女がいた。

そして、目の前の銀メッシュ。

「ま、まさか……トランプッ!？」

「俺らのこと知ってたんだ？」

「もう伝説みたいなのもあるけどヨー」

「あたしがクイーンだよー」

不敵な笑みを浮かべる春一とは裏腹に、二人組はさーっと血の気が引くのを感じた。自分は、とてつもない人達に喧嘩を売ってしまったらしい。

「す、すみません、トランプだとは知らずに……」

「許してくださいっ」

「凜、どうするよ？俺らはお前の決定次第で動くぜ」

「……もう、二度とこんなことはしない？僕含め、他の人たちにもだ」

「しない、悪かったよ!」

「……なら、いいよ。許すまでにはまだ時間がかかるかもしれないけど、とにかく、今は行つていいよ」

凜の言葉を聞くと、二人は寝ているもう一人を起こして、バイクに跨って帰って行った。

「ハル君、ジヨー君、琉妃香ちゃん、ありがとう。おかげで助かったよ」

「当たり前だろ？気にすんなって」

「そーそー、ダチだしヨ？」

「友達が困ってる時は、助けるのが本当のダチってやつだよ!」

その言葉が嬉しくて、凜は不意に涙をこぼしそうになったが、今は泣く時ではなく笑う時だと思い直し、最高の笑顔を見せた。

四人はそのまま四季家へとやってきた。公園から近かったことと、凜の傷の手当てをするためだ。

「夏、手当してやって。俺は救急箱の場所すら知らないから」

「階段の収納スペースに置いてあると前も言っただでしょう」

「うるさいな。いいから手当て。早く」

「はい」

はあと溜息を吐き出して、救急箱を持つてくる。中から必要なものを取って、凜の手当てに取り掛かる。凜は若干の呻き声を発しつつも、我慢して手当てを受けていた。

「しかし、あなたたちはどれだけ有名な不良なんですか」

「不良じゃねーって」

「どこがですか」

「ナツちゃん、不良扱いは勘弁だぜ？俺らのどこがふりょーなんだってノ」

「そーだよ夏兄、ひどい」

「そんなに非難されても……」

「俺らだって好きにこうなっただけじゃねーっての」

「そうそう」

「じゃあ何故こんなことに？」

「そりゃあ……どっから話せばいいんだ？」

「ガキの頃かラ？」

三人で話し合った結果、三人が幼少期の頃から話すことになったらしい。夏輝と凜が待っていると、春一が腕を組んで話し始めた。トランプの結成について。

時は十二年前に遡る。春一達が小学校に入学した時代。髪もまだ全員黒く、ピアスも開いていなかった時。

三人は入学してクラスが一緒になると、すぐ仲良くなった。小学校一年生の頃はクラスメート全員が友達のようなものだが、この三人は特に仲が良かった。元々性格が似ているということもあり、学校にいる間も終わっても、三人は毎日一緒に遊んだ。

そうして一学期が過ぎ、二学期に入った時、事件は起きた。

春一と丈は、毎朝一緒に登校していた。琉妃香だけ家が別方向なので、登校だけは分かれていた。大方春一と丈のどちらかが寝坊をするので、いつも琉妃香が教室で二人を待っていた。そして今日も春一の寝坊のせいで遅れて教室にやってきた二人は、異変に気付いた。

いつもいるはずの席に、琉妃香がいないのだ。赤いランドセルはあるのに、琉妃香本人がいない。彼女は今日日直ではないはずだし、どこかへ行くなら他のクラスメートに言伝を頼むはずだ。

「ねえ、琉妃香知らねえ？」

春一が近くにいたクラスメートの男子に尋ねると、その子は困ったように目を逸らした。何かを知っている表情だ。

「おい、琉妃香どこだよ？」

丈が肩を掴んで揺さぶると、男の子は泣きそうな顔になって口を開いた。

「三年生に連れていかれたんだよ！五人くらいで来て、琉妃香ちゃん連れて行っちゃった」

その言葉を聞いて、春一と丈の目が見開かれる。丈も相手を揺するのをやめ、放心状態で固まる。

「……どこ行った？おい、どこ行っただんだ！？」

春一が声を荒らげて聞くと、男の子は震える声で「プールの方」と言った。春一と丈はそれを聞か否や、すぐに駆け出した。

一年生の教室がある校舎の東側には、プールがある。プールはちょうど棟と棟の間にあるので、他の場所からは見えにくく、影になっている。

二人がプールの方に駆けつけると、柵に追い詰められた琉妃香と、それを取り囲む五人の三年生がいた。琉妃香は泣きそうになっていて、目に溜まった涙が震えている。

「何してんだあつ！」

春一と丈が同時に叫ぶ。その声に琉妃香と三年生たちが一斉に二人を見る。

「琉妃香に何してんだ、テメエラ！」

丈が叫ぶと、三年生の中でも特に体の大きいリーダーが一步前へ出てきた。

「コイツが生意気だから話聞いてんだよ！弱いくせに薙刀なんてやって、調子乗ってるからな！あの木刀がないと何もできないくせに」

琉妃香は幼稚園の頃から薙刀を始めていた。その才能は早くから開花し、年上の相手でも琉妃香には敵わないほどだった。またスポーツも万能で、男子にも引けを取らないその運動神経と、小学校一年生とは思えない美貌で多くの生徒から憧れの目で見られていた。七歳という年でも、彼女に好意を持つ生徒は少なくなかった。

しかし、それは同時に妬みも生み出した。自分にはないものを持っている他人を、人は時に羨み、時に妬む。常に一番でありたいという子供らしい欲求を持つ一部の生徒にとって、琉妃香は妬みの対象だった。

三年生の内の一人が琉妃香の髪を引っ張ろうとするので、春一はその腕を掴んで止めた。この二人もスポーツをやらせたら万能だ。

力だつてそこら辺の上級生には負けない。

「お前ら、一年生が三年生に勝てると思つてんのか！」

「そうだ、こっちは五人もいるんだぞ！」

「だから何だよ……？」

春一がとても一年生とは思えない凄みを利かせて三年生の前に立ちはだかる。

「このっ……！」

春一に腕を掴まれていた三年生が、春一の腕を叩いた。春一は手を離し、その手を握り固めてその三年生の顔面を思い切り殴った。

「やったな！」

それに他の三年生が二人に殴りかかった。やはり相手は上級生だけあつて、強い。殴る拳は痛い、手を休めたらこちらが殴られる。春一と丈はぼろぼろになりながら、この喧嘩に勝利した。やられた三年生はめいめいに泣いて逃げ出し、後には三人が残された。

「あー……いつてー」

「ちくしょー思い切り殴りやがッテ」

顔をごしごしと乱暴に手で拭つて、それでまた痛くなつて顔を顰める。だが、二人は琉妃香に笑顔を見せた。

「琉妃香、大丈夫か？」

「何もされなかった力？」

二人の笑顔がとても痛々しくて、琉妃香は大声を上げて泣いた。

春一と丈は最初、初めて見る琉妃香の涙に呆けていたが、すぐに自分たちが泣かせてしまったと思つて慌てふためいた。

「る、琉妃香！」

「悪かつたヨ、泣くなんて思つてなかったカラ……」

おろおろするばかりの二人に、琉妃香はしゃくりあげながら首をぶんぶんと振った。

「ちが……違うの。あたしのために……ごめ、ごめんね、ハル、ジヨー」

その言葉を聞くと、おろおろとしていた二人の態度が一変。二人

は太陽のように二カツと笑った。

「そんなの、何も悪かねーヨ」

「そうそう、こんなん痛くも痒くもねーし」

「お前さつき痛いつて言つてただ口！」

「そ……そんなん忘れたよ！」

ギヤーギヤーと騒ぐ二人に、琉妃香は自然と笑顔になった。それが嬉しくて、二人は言い合いを忘れて笑った。三人はひとしきり笑って、教室に戻った。

程なくして、三人は職員室に呼ばれ、春一と丈はこっぴどく叱られた。しかし琉妃香が庇ったため、時間はそれほど長くならなかった。

それからだ。琉妃香が薙刀だけでなく護身術や居合も覚え、二人を負かすまでになったのは。

彼らは琉妃香の涙をあれ以来一度も見えていない。腕つぶしもだが、心も強い女性なのだ。二人は信じている。その信頼こそが、琉妃香の心を強くする一番の要因なのだ。それは二人には言っていないが、言う必要もない。三人それぞれが皆同じことを思っていることは、見えないことだが火を見るより明らかだからだ。

今日は土曜日。日曜日に向け、夜更かしでも飲み明かしでも何でもできる曜日である。大学が休みの春一は、家で課題と向き合っていた。時折辞書を使いながら、英語とにらめっこをしている。

店を閉めた夏輝がダイニングに上がると、春一がシャーペンで頭をこつこつと叩きながらパソコンを立ち上げていた。

「少し休憩したらどうですか？すぐ夕飯を作ります」

「おう、そうするか。今日のメニューは？」

「ラザニアです」

「いいね」

春一は机の上を片付けて、ソファへと移った。テレビを見ながら夕飯が出来上がるのを待つ。今は時間的にどのチャンネルも夕方のニュースを伝えており、春一は適当に局を選んでそれをぼうつと眺めた。

『続いて、県内ニュースです。昨日の深夜、数珠市の山で自動車の事故が発生しました。車はガードレールを突き破り谷底に落下。運転をしていた山路透さん、二十一歳が重傷を負いました。この山での事故は今月に入りすでに八件目ということで、県警では注意を呼びかけています』

（事故か……。今月が始まってまだ半分……。それで八件は多すぎる。何か事件が絡んでるのか？）

春一は若干眉間に皺を寄せたが、自分の考え過ぎだと頭を振った。「どうかしたんですか？」

スープを運んでいた夏輝が春一に声をかけた。

「ん、ああ。県内で事故が続発してるってんで、運転するときは気をつけねえとなって思ってたさ」

「ああ、数珠峠で発生している連続事故ですよ。前を走るシルビアに勝負を仕掛けられて、それに乗ってしまうと事故をしてしまうっていう……」

「そうなのか？」

「ネットに載っていましたよ。最近巷を騒がせているので、情報もそれなりに多くあります。尤も、信憑性には欠けますが」

「ふん……」

春一は顎に手を当てて考えていたが、その考えはチャイムの音で消された。すぐに夏輝が玄関へと出ていく。すると、少しして傷だらけの男を連れてやってきた。

「ハル、事故の被害者の方です。妖のことで相談があると」

「……話を聞こう」

夕飯は後回しになってしまった。今数珠市で頻発している、峠での自動車事故。その被害者である男性が四季文房具店を訪れたからだ。

「もう閉店してるのに上り込んで、すみません」

やってきた彼は、二十代前半くらいで体のいたるところに傷を作り、包帯を巻いている。見るからに痛々しい風貌の男は、時間外に来てしまったことを詫びてから、勧められた椅子に腰を下ろした。夏輝がすぐにコーヒーを差し出すと、彼は一礼してそれを飲んだ。

「えと、君は……？」

男が春一のことを見て問いかける。夏輝はすぐに誓約書を取り出して、彼の前に置いた。誓約書の内容は、第一に「どんな人間が事件を調査しても文句を言わないこと」と若干不吉な文章が書かれ、その下には、依頼人は調査に協力をするようにとの事務的な事柄が何項かに渡って書かれていた。

「一筆いただけますでしょうか？」

夏輝がモンブランのボールペンを差し出すと、彼は戸惑いながらもそれにサインした。それを見届けた春一が、一つ咳払いをして姿勢を正す。

「店主の四季春一です。よろしくお願いします」

男は一瞬固まった。何を言われているのかわからない様子だ。そんな彼のことなどまるで無視した春一が、誓約書を摘み上げてサインの欄を見る。

「良^{じょう}さんね。改めましてこんばんは。ようこそ四季文房具店へ」

「君^{きみ}が……店主？」

「ええ。文房具店の店主はそこにいる夏ですが、妖万屋においての

店主は僕です。夏は助手」

いまだに信じられないという風にぎこちない良を、春一は例の如く無視して依頼の内容へと移った。

「それで、ご依頼は？今回の連続事故絡みということですが」

「は、はい……」

良はやつと頷いて、その口を開いた。

「俺は、走り屋チーム『Noisy Road』のもんなんだけど、最近俺らが使ってる峠で事故が起こってるんです。ニュースとかでもやってるかもしれないですけど……」

「ニュースで見ました。詳しくお聞かせ願えますか？」

「はい。俺のチーム内でも五人が被害に遭ってます。前を走る白いシルビアが勝負を吹っかけてくるんです。それで、それに乗って走っていると……突然、そいつが消えるんです！前を走ってるはずのシルビアが急に消えて、そうやってパニクってる内に事故して……」

「本当、みんな妖怪か幽霊の仕業じゃないかって言ってる……。この件、お願いできますか？」

「お引き受けしましょう」

春一の自信満々な笑みが、不安でたまらない良を安心させた。

夏輝はその夜、山道を車で走っていた。例の事件の調査をするため、一番新しい事故の現場へと向かっている最中だった。

すると、彼が運転する車の前に、一台の白い車が現れた。

（幸か不幸か、出会ってしまうとは……）

夏輝は車に明るくはないが、目の前の車が例の車だということはわかる。最大限の注意を払いながら、後ろについて走る。

（あれは……！）

前を走るシルビアが、窓から手を出して挑発してくる。バトルを仕掛けているのだ。

夏輝は迷った。ここで勝負に載って妖を試すべきか、安全を第一に考え乗らないべきか。少しの間考えた結果、このまま様子を見てみようという結論に達した。勝負には乗らず、このまま後ろを走ってみる。妖の出方を窺う。

しばらく走ると、シルビアは再度挑発をしてきた。夏輝はそれに乗らず、追従を続けた。山は下りに入り、そろそろ事故現場だ。夏輝は事故現場まで行ったら車を路肩に停めようと考えていた。その刹那、彼の前から、シルビアが消えた。車のライトが照らすのは、夜の闇だけだ。

そこで夏輝は異変に気が付いた。確かに今は夜だ。視界は悪い。だが、見えなさすぎる。黒いマジックで塗りつぶしたような、違和感のある黒い闇が目の前に広がっている。

これは変だと理論でなく直感で気付いた夏輝は、すぐに車を左へ寄せて停車しようとした。しかし、遅すぎた。

闇の後に突如現れたのは、白いガードレール。

「しま……っ！」

急ハンドルを切り、ブレーキを食いっばい踏み込む。しかし車はもちろんすぐには止まらず、そのままガードレールに衝突した。その衝撃で、夏輝の意識は途切れかかった。しかし彼は力を振り絞り、何とか顔を上げた。すると、黒い闇の中を白いシルビアが走っている。光景が見えた。さっきまでとは違い、周りも薄暗くはあるが、見えている。夏輝はそれを確認すると、静かにまどろむ意識の中へと落ちて行った。

春一が病院から知らせを受けて飛んでいくと、ベッドには傷だらけの夏輝が寝ていた。まだ意識は戻らないらしい。

春一はベッドの脇にヘルメットを置いて、椅子に腰かけた。ギシ、と椅子が軋む音やけにうるさく聞こえる。

しばらく座っていると、部屋のドアがノックされて、医師と看護師が入ってきた。春一は立って会釈して、医師の言葉を待った。

「同居人の方ですか？」

「はい」

医師は頷いて、傷の具合を話し始めた。

「内臓や脳に損傷はありませんが、打撲がひどく、肋骨と鎖骨を骨折しています。意識はもう少しで戻るでしょう」

「そうですか。ありがとうございます」

春一が頭を下げると、医師は軽く頭を下げて部屋から出て行った。それからしばらくすると、夏輝が軽い呻き声を上げた。春一はすぐに立ち上がってベッドのそばに寄った。

「ハ……ル」

「夏、大丈夫か？」

「はい……。すみません、車を壊してしまいました……」

「お前な、こんな時になんだけど、殴るぞ？んなことどうだっていいっての。……無事で良かった……！」

心から安堵の表情を浮かべる春一に、夏輝は「すみません」という言葉を発しかけて飲み込んだ。

「ハル、今回の事件ですが……」

「事件のことは忘れる。今のお前は妖万屋である前に患者なんだから」

「いえ、言わせてください。私はハルの助手ですから」

「お前ってそういう所頑固だよー」

春一はため息をついて、頭をぼりぼりと掻いた。少し躊躇った後、
「聞こう」と言った。

夏輝は自分が見たものの全てを春一に話した。妖怪の乗る白いシルビア、そしてそれが不自然なほど暗い闇に消えたこと、事故をした後に走り去るシルビアを見たこと、一つの情報も漏らさず、詳細を伝えた。

「わかった。お前の調査結果は無駄にしねえ。後は俺に任せて、療養しろ」

「はい、ありがとうございます」

春一は頷いて、ヘルメットを手にした。

「また来るよ、じゃあな」

それだけ言って、彼は部屋を出た。

「久しぶり、由良さん」

「おーっ、ハル坊、元気してた？」

「元気っすよ。由良さんは？店繁盛してますか？」

「おかげさまでね」

春一がやってきたのは、一件の中古車ショップ。中古車販売から車の修理・整備まで行っているその販売店で、春一と彼よりも十歳ほど年上と見られる女性が話している。

由良と呼ばれたその女性は、長い髪を後ろに流し、前髪は赤く染めていた。スタイリッシュなスーツに身を包み、大人の雰囲気醸し出している。彼女はこの中古車ショップの代表取締役であり、そして春一の知り合いでもあった。

「どうしたの、ハル坊？パーツでも見に来た？」

「いやそれが、事故で車オシヤカになっちまって……」

「事故！？大丈夫なの？」

「事故つたのは俺じゃないから、俺は大丈夫なんだけどね。車が全損イッちまったから、ちよっと見してもらおうと思つて」

「そっか。そういうことならゆっくり見てつて。ハル坊なら安くしとくよ」

「ありがと」

春一は由良と一緒に車を見て回った。メーカーは問わず、たくさん車種がある。プレジデントやキャデラック、GTR、FD、インプレッサ、レガシイ、ハコスカ、コルベット……普通の乗用車はないが、VIPカーやアメ車、旧車まで、様々な車を取り揃えられている。

「何にしようかな」

春一はウキウキとした表情で、店の隅々まで車を見て回った。そして、一つの倉庫の前で立ち止まった。倉庫はシャッターが半開きになっており、そこから一台の車が顔をのぞかせていた。

「まだ、大事に取ってあるんだね、このFC」

春一の顔に、ふっと悲しみの影が落ちる。倉庫に入っている真っ白なFC。今にも動き出しそうで、良く手入れされている。

「捨てられないよ……この車は」

「もう、四年も経つんだね。あれから」

「四年……か。そうだね。あの時はハル坊もジョーも琉妃香もまだ中学生で……」

由良が言葉に詰まる。込み上げる涙を必死に堪えて顔を上げる。

「思い出させてゴメン」

「いいの。それに、思い出は思い出さないとなくなっちゃうから」

由良の無理な笑顔に春一は目を伏せて、FCを見た。

（秋志……何で、由良さん残して逝っちまったんだよ？）

中学三年生になるまでに、春一、丈、琉妃香の三人は数々の喧嘩を買ってきた。それは彼らを「不良」と位置付けるには十分であり、世間が彼らに冷たく接する理由としては領けるものだった。今まで友達だった者の目は冷たく、態度は余所余所しくなった。

しかしそれは、必然的に三人が結束するという結果になった。それぞれがそれぞれの拠り所に。いつの間にか三人だけであるのが普通になっていった。

学校はいつしか行かなくなり、昼夜三人で行動するのが当たり前になった。

だが、彼らは決して自ら喧嘩を売ったことはない。こちら側から手を出すことなどいくらでもあるが、彼らが喧嘩をする時と言えば、相手が誰かを虐げている時や、向こうが三人の内の誰かに手を出そうとした時だけだ。喧嘩を売られても基本的には相手をしなかったが、相手が誰かに手を出そうとすると（特に琉妃香）系がいと簡単に切れるため、すぐ喧嘩に発展した。

煙草も酒もやらなかった。元々、「トランプ」なんて名前を付けられるのも不本意だった。有名になればなるほど、敵は増えた。そのたびに誤解は増えた。

警察の厄介になることも珍しくはなかった……どころか、むしろ常連だった。年も増すごとにそれは多くなり、本格味を帯びてきた。警察に連れて行かれそうになると、春一と丈はまず琉妃香を逃がした。琉妃香は常々不平を言っていた。自分だけ助かるのは不公平だと。しかし、二人は頑として聞き入れなかった。琉妃香は絶対捕まらせたくない。それが二人の願いで、琉妃香は二人が一度決めたことを譲らないということを知っていたし、何度講義しても無駄だ

った。故に、トランプが三人組だということを知っている人間は少ない。彼らと直接会っていなければ知らないだろう。

「またお前らか！」

「うつせーな、こつちだって来たかねーよ！テメーらが連れてくん
だろが！」

「そーだヨ！来てほしくなかったら連れてくんのやめりやいいじゃ
ねー力！」

警察署の少年課で、椅子にふんぞり返って座り、文句を垂れる二
人に刑事は机をドンと叩いた。

「オメーら静かにしやがれ！」

「じゃあまずテメーが静かにしろよ！」

「黙らせてやん力！」

「んだと！」

いつものやり取りが続いたある日。いつもとは違う光景がそこに
介入してきた。

「おうおう、威勢のいい奴らだな。聞くまでもなく元気だな」

「誰だテメー！」

「俺らに何の用だヨ！」

「ちったあ落ち着けよ……。俺は秋志。少年課の刑事よ」

それが、初めての出会いだった。

秋志と名乗ったのは、二十代後半くらいだろうか、若者だった。

短く立った黒髪に、黒く丸いサングラス。背は高く、百八十センチに届こうかという長身だ。快活で、笑い顔がよく似合う。尤も、目は隠れているのだが。

「んだよ、俺ら年少送りにしようって気が！」

「上等だ、してみるヨ！」

「んな気はねえよ。とりあえず落ち着けてんだろ。俺は知ってんだぜ？お前らのことをよ」

「俺らの何知ってんだヨ！初めて会ったくせにヨ！」

「ホラ吹きかテメー！」

秋志はやれやれと溜息をついて肩を落とした。幅の広い肩が垂れ下がる。

「お前らは本当に悪いことはしちゃいねーんだよな。お前らが喧嘩を吹っかける時は決まって誰かを助けるためだ。正義のヒーローって言えば聞こえはいいか？」

二人の目が点になる。それはそうだ。今まで否定しかされてこなかった自分達の行動が、初めて理解された。

「お前ら根はいい奴なんだよな。お前らの仲間、もう一人いんだろ？美人な女の子」

「琉妃香に何しよって気だ！」

「手え出したらタダじゃおかねえゾ！」

「だーかーらー」

秋志は面倒くさそうに一語一語を伸ばして二人に顔を近づけた。

「再三言っぞ、落ち着け。お前らどれだけ血の気多いのよ？お前らのお姫様に手は出さん。何もしてない」

それだけ聞いて、二人の怒り肩が少し落ち着く。

「お前らの仲間の女の子も同じだ。本当に悪いことはしてない。更にお前らはその子を絶対に逃がしてる。まあ、女の子の方はしてることも少ないから、お前らに比べれば大分マシだけだな。随分オツトコ前じゃん？」

「オイ」

椅子にどっかりと座って足を組む秋志に、春一が立ち上がってズイと威圧した。周りの刑事達は臨戦態勢に入っている。

「俺らおちよくって何が楽しいんよ？そんなに喧嘩買ってほしいんなら、買ってやんぜ！」

血管を浮き上がらせる春一に対し、秋志は立って彼を見下ろした。春一の肩をドンと押し、無理やり座らせた。

「これが最後だ。落ち着け。俺はお前らのことをおちよくってるわけじゃない。認めてんだ」

再び立ち上がろうとした春一の動きが止まる。隣で丈も止まっている。自分達のしたことが認められるなど、初めての経験だった。

「けどな、お前らのしてることはあんまり褒められるものでもねえ。確かに間違っちゃいねえが、正解でもねえ。その力、もっと違うとこに使え」

二人は打ちひしがれた。今まで彼らを相手にしてきた刑事達はみな口々に怒鳴りつけ、同じことを言った。彼らはそれに反発し、時に殴り掛かった。だが、秋志には声静かに諭され、それに心を挫かれた。

間違っではない。だが、正解でもない。

「女の子にもさつき会ってきたよ。だから遅れたんだが……。あの子もお前らと一緒に根はいい子だった。んでもって、お前らと一緒に俺に噛みついてきた。『ハルとジョーに何かしたのか』ってな。お前ら三人、似た者同士だ」

そこで秋志はサングラスの奥の目を覗かせ、笑った。

「お前らの結束力がありゃ、きつと俺らみたいな警察には屈しない

だろう。これからずっとこんなことを繰り返すこともできるだろう。……けどな、俺はそれと同じくらい、お前らがまっとうに生きていける可能性があると思う。それでもって俺は、そっちの方が楽しいだろうとも思う。監獄に入って三人別々になるよりは、青空の下で一緒になつてた方が断然いい。そう思わないか？」

春一と丈は黙った。こんなの、自分達を抑えるために適當を言っているに決まっている。そうやってわかったフリをして、結局は信じていない。扉の外に出れば、「あんな奴ら社会のゴミだ」と言うに決まっている。

だが、二人は齒を噛みしめるだけで、それを言動に出すことができなかった。いつもなら殴り掛かる乃至、声を荒らげているなりしているはずだ。なのに、今回はそれができなかった。何故かはわからない。秋志という人間が持つ雰囲気。そうとしか言えなかった。

「ハッハッハ！」

いきなり秋志が笑った。二人は何事かと、彼を見上げた。

「お前らおもしれーよ！まるで女の子と同じ反応するんだもんなあ。お前ら三人の結束力、実はちょっとだけみくびってた。悪かった。

……正直言つとな、お前らがこのままブタ箱ぶち込まれようが、俺には関係ねえ。だがその絆、大事にしるよ。他の人間にはなかなかそんな強い絆は作れねえ。お前らは、一生かかっても作れねえもんを、もう持ってるんだ。それは誇れ」

今度は、齒の食いしほりもなくなった。筋肉が緩み、呆氣にとられる。彼らは、今まで当たり前すぎて気づいていなかった絆の強さを、しかと感じた。それは、多大なる安心感を与えてくれるものだと、今になって気付いた。

「お前ら、もう帰っていいぞ。俺昨日からここに赴任してきて、やらなきゃいけないことが山積みなの。お前らの相手なんてしてる暇ないから」

早く帰れと手を振る秋志に、二人はもう何も言えなくなった。襟首を掴まれて無理に立たされ、背中を手の平で押された。二人はど

ちらともなく歩き出し、署を後にした。

それからしばらくの間、三人は行動を落ち着けた。秋志といった時間はほんの僅か。言われたこともほんの僅か。それでも、何か浸透するものが、三人にはあった。それはじわじわと、しかし確実に三人の心に染み込んできた。

「何だっただんだあの刑事」

「意味わかんなかったナ」

「ホント」

毎度おなじみとなっている三人のたまり場、丈の車庫で、三人はまた今日も暇をつぶしていた。

「散歩でも行ってみつか？なんか、じっとしてんのは性に合わねー」

「だナ。琉妃香も行くか？」

「そういうの愚問って言うんだぜー」

「コイツ、難しい言葉覚えやがったナ。俺ら出し抜こーって気力！」

「バーカ。お前らなんてとっくに出し抜いてんだよ」

「チクショー、あの可愛い琉妃香はどこ行ったんだ？」

「どのあたしだよ！っつーか今は可愛くねーってか！」

「冗談だよ」

「知ってんよ」

三人はとりあえず人気のない道を歩いた。散歩をするなら静かな方がいい。そのまま公園に來ると、駐車場に目を引く車が一台あった。真つ白なFCだ。

「おーFCじゃん。俺免許取ったらあれ乗りてーんだよ」

「FCかっこいいナ。俺FD派だけド」

「えー、そこはやっぱGTRじゃない？」

そんな話をしていたら、そのFCから人が降りてきた。三人はその顔に見覚えがあった。この間警察署で見た、秋志だ。

秋志は車を降りると、走って公園の中へと入って行った。三人は顔を見合わせて頷き合い、秋志の後を追った。

三人が秋志を見つけた時、彼は一人の男と対峙していた。すると、三人の皮膚を何かがびりびりと刺激した。あれは普通の人間ではない。何か、言葉では言い知れぬものが感じ取れる。それは三人ともが感じているようで、誰ともなく目を合わせてその異様な存在を確認し合った。

「お前かあ、近頃盗み働いてるって奴は。話し合う気は……ねーな。来いよ、デカブツ」

秋志が挑発的に言うのと、対峙している男が秋志に殴り掛かった。瞬間、秋志に倒される。彼は、腕を振りぬいたのかもわからないスビードで、その男を倒してしまった。

「終了」

なんてことのない風に言っ、手に巻いた包帯のようなものをくるくると手から外し、それを小さく丸める。その光景に黙っていられなくなった三人は、そこから飛び出した。

「デメー、どういうことだ！」

「俺らに説教しといて自分は勝手がヨ！」

「結局あたしら騙してたわけかよ！」

飛び出してきた三人に秋志は多少の驚きを顔に出して、苦笑した。「おうおう、そろそろとサーカスカ、オメーらは。ちつと静かにしろ。こいつを引き渡すまで待ってる」

「引き渡す……？」

春一達が何事かと目を向けていると、秋志はどこかへと電話をして、所在を告げた。短く二、三言述べて切る。

その後でその男の後ろ手を縛りつけてそこから少し離れた、自動販売機とベンチがある場所に移動した。

「ホレ」

「！」

秋志がアイスの販売機でストロベリーのアイスを買って琉妃香に投げる。その後でクリームソーダを丈に、抹茶を春一に投げて寄越した。

「何のつもりだテメー！餌付けしようって気力！」

「餌付けって！お前ら本当にサーカス？」

食って掛かる丈に、秋志は腹を抱えて笑った。春一が我慢ならぬ風に、アイスを秋志に投げつける。全力投球をしたのに、それはいとも簡単に取られた。

「食い物は粗末にするもんじゃねーぜ」

「そんなもんいらねー。それより、説明しろ！」

春一が怒鳴ると、秋志はふっと笑ってベンチに座った。

「座れよ。一から説明してやる。尤も、信じるかどうかはオメーら次第」

そこで秋志は、妖怪について語り始めた。そして自分がつけていた呪符のこと、枢要院のこと。自分が彼らに頼まれて妖万屋をしていることも。

秋志は三人が妖怪と関われる力があることに気付いていた。勘のいい人間ならばわかるのだが、秋志にはそれがとても強く感じられた。まるで、秋志に「気付け」と言わんばかりの強さだった。

そのサングラスの奥の瞳は、三人の反応を楽しむかのように常に愉快そうだった。が、それは三人に見えるはずもなかった。

「つつーわけよ。わかった？」

三人は眉間に皺が寄ったまま、それを解けないでいた。いつもの睨み顔とは違う、ただ純粋な疑問が募っていた。

「信じてねーな！俺のことを痛い兄ちゃんだと思ってるだろ！だが実はそうじゃないんだな。ちよつと来いよ」

結局三人分のアイスを平らげた秋志が、先程の妖怪の元へと歩み寄った。

「強い妖怪を相手にする時は呪符がないと相手にできねーんだ。つか、この呪符自体が高等技術者用だから並の人間がつけたら電流走ったみたいに痺れて、結構痛いぜ？んでもって……」

秋志はいきなり、せつかくしぱりつけた妖怪の縄をほどいた。これで妖怪が目覚ませば、すぐに動くことができてしまう。

「この呪符がないと、こういう妖怪には太刀打ちできないんだな、これが。お前ら、ちよいやってみるよ。素手のこいつと、お前ら三人、絶対勝負になんねーから」

その言葉に三人の表情が一変する。そんな挑発的に物を言われて黙っていられるほど血の気が少ないわけではない。

「上等だ、やってやんヨ！」

「そんな奴、俺らいくらでも沈めてきてんぞ！」

「後悔すんなよ！」

「…… やってみろ」

秋志が妖怪の頬を叩いて起こす。妖怪は驚いて目を開け、すぐ臨戦態勢になった。

「いや、相手は俺じゃなくてさ、あっち。俺とやりたきゃ、あのガキ共片付けてからな」

すまし顔で言う秋志に、妖怪はにたりと不敵に笑った。

「どうなっても、知らないぞ？」

「いいよ」

その秋志の申し出に了承した妖怪は、春一と丈に向かって突進してきた。速い。

「その程度、普通だぜ！」

春一が近くにあった木を蹴って大きくジャンプする。そのまま妖怪の頭付近に跳ぶと、顔面に膝蹴りを食らわせた。

「どうだ！」

が、当の妖怪は何のダメージもなく、そこに立っている。

「んだと！？」

「こつちだ！」

今度は丈が渾身の力で振りぬいた拳を妖怪の顔面に食らわせる。手ごたえはあった。だが、ノーダメージなのだ。

「ナッ！？」

力を入れすぎてから回ってしまった丈に、容赦なく妖怪の剛腕から突き出された拳が突き刺さる。

「ガッ！」

殴り飛ばされた丈は、あまりのダメージに起き上がることができなくなってしまった。自分が一撃で伸されるなど、今までになかった。

「ジョー！」

琉妃香がすぐに向かって介抱する。春一は焦点を妖怪に変え、鋭く睨みつけた。

「テメー！ジョーに何しやがる！」

助走をつけて飛び回し蹴りを叩き込もうと跳んだところを、丈と同じく殴り飛ばされる。無様に倒れて動けない。

妖怪は、今度は琉妃香に狙いをつけた。

「テメエ……琉妃香に手え出したらタダじゃおかねえ……！」

「マジ無事じゃ済まされねーぜ……？」

何とか足に力を入れて立ちあがると、妖怪はまたしても二人に的を絞った。

「あいつら、あれ立つかよ……」

ひょうきんに驚いた様子をした秋志は、自分の持っている呪符を一つずつ、春一と丈に投げて渡した。

「それ使ってみるよ！」

二人は秋志がやっていたように、手にそれを巻きつけた。

「あれ……？」

ここで秋志の予想と違うことが起きた。あの呪符は高等技術者用である。並の人間がつけたらどうなるかは説明済みである。しかし、その拒絶反応が起きないのだ。呪符が、春一と丈を高等技術者として認めてしまったのだ。

「チクシヨー、今から反撃行けぜ！」

「オオヨ！」

春一と丈は顔を乱暴に拭ってその妖怪に立ち向かった。春一の拳が空を切り、妖怪が避けた先に丈の拳が待ち受けている。

「オラア！」

先程と同じように殴ると、今度は妖怪が怯んだ。間違いなくさつきとは違い、効いている。

「このっ！」

上体が崩れたところに春一のハイキックが飛んでくる。蹴られた妖怪はそのまま倒れそうになる。

「へえ、効いてんじゃない？」

「よくわかんねーけど、スゲエじゃん？……まあ、俺らにしてみりゃそれはどーでもいいのヨ」

「そうだ。テメーさつき琉妃香狙ったよな……？」

「それだけは許すわけにはいかなーんだ！」

二人の蹴りと拳が妖怪の顔面を捉え、あえなく妖怪は再び撃沈してしまった。

「ハル！ジヨー！大丈夫？」

「お前何急に乙女チックになつてんヨ？」

「今までに大丈夫じゃなかったことあつたつけ？」

「オメーら……強がるんじゃないよ！」

琉妃香が二人の頬を叩くと、二人の顔が苦痛に歪んだ。妖怪に殴られたダメージは計り知れない。

「おうおう、スゲーことやっちゃまったな、オメーら……」

驚きで物も言えなくなってしまった秋志を余所目に、三人は何だかんだで笑い合っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0948y/>

TRUMP?

2011年11月24日16時52分発行